

古河力作の生涯

水上勉

平凡社

古河力作の生涯

昭和48年11月20日 初版第1刷発行

著 者 水上 勉

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町4番地1

郵便番号102 振替 東京29639

電話 東京(03) 265-0451

印刷 明和印刷株式会社

製本 株式会社石津製本所

©水上 勉 1973

不良本のお取替えは直接小社サービス課まで
(送料は小社負担)

あとがき

「古河力作の生涯」を書かねばならなかったわけについては、本文でも述べたので、あらためていうことはないが、つけたりを一つ二つ書いてみると、私と同じ故郷をもつ古河力作の境遇に、私がひとなみならぬ哀惜をもってきたこと、福井県の片隅に生まれた身丈尋常でない少年が、草花栽培というのどかな職業に従事していながら、なぜに大逆事件の死刑者の仲間に入ってしまったのか、その不思議ともいえる運命を私なりにさぐりあててみたかったのである。

読んでもらえばわかるはずだが、何といっても、当時の世情が、花づくりの人にさえも、大きな翳を落として、政治のありかた、人生の幸福の求め方に、ひとつの工夫をあたえてしまったということにほかならない。人間も花樹と一しよで、土壌があつて稔るものである。力作は力作なりに自分の土を耕して一生懸命に生き、二十八歳

で、刑死した。しかし、私は当時を見たわけではなかった。それで力作の生まれた村をふりだしに、神戸、東京と、彼の住んだ町々を歩いた。事件のことや、力作の人となりについては、それを知る存命の方々に会い、苦心の著作をなした人びとの書物をよんで、私なりの知恵とした。とりわけて、神崎清氏、絲屋寿雄氏の著作に恩をうけた。また、雑誌「太陽」に連載というかたちをとったので、連載中にいろいろな方から励ましの手紙に接し、新しい資料もいただいた。力作の従兄にあたられる古河滋氏、草花園主印東熊児氏の長男玄一氏に会えたことは喜びであった。また、森長英三郎氏、望月桂氏、添田知道氏、菅野丈右衛門氏などから懇切な指摘をうけ、さらに力作の弟さんである三樹松氏から、遺品の聖書、写真、書簡、事件記録など、多数の資料もあたえられたことは大きな力であった。私は天下国家について大きく発言するのは嫌いだ。しかし、天下国家の片隅にあって、天下国家の運命に踏みたかかれてゆく小さな人生についての関心はふかくある。今日もその関心はつよい方だ。力作の人生を掘りおこすことで、この国のありようというもの

に、自然とつきあたり、ひとことというなら、明治も今もかわっていない国柄というものについて、ずいぶん考えさせられていった。このことも、「古河力作」から与えられたものというしかないだろ。たくさんさんの資料、書物を読んだ。次に列挙して、厚くお礼申しあげる次第である。

革命伝説全四巻（神崎清著）、日本社会主義運動史（荒畑寒村著）、大逆事件（絲屋寿雄著）、実録幸徳秋水（神崎清著）、幸徳秋水（田中惣五郎著）、大逆事件（神崎清著）、大逆事件の思い出（沖野岩三郎著）、寒村自伝（荒畑寒村著）、獄中手記（神崎清編）、十二人の死刑囚（渡辺順三編）、石川啄木と大逆事件（吉田孤羊著）、大逆事件顛末（宮武外骨著）、思い出すこと忘れえぬ人（桑原武夫著）、女二代の記（山川菊栄著）、海商古河屋（古河嘉雄著）、赤と黒（立野信之著）、大逆事件（尾崎士郎著）、遠い声（瀬戸内晴美著）、日本の歴史（中央公論社刊のうち）資本主義創生記・色川大吉著、産業革命・隅谷三喜男著、日本社会主義運動史（小山松吉著）、大

逆事件裁判記録、小浜敦賀三国資料、遠敷郡誌、福井県史、兵庫県の歴史（順不同）

一九七三年十月二十五日

水上 勉

一章

若狹の生家から、城下町の小浜まで買い物にゆくのに峠を二つ越えた。四里はあったろう。途中は美しい海岸で、白砂のえぐれた入江があったり、原始林の岬が突き出ていたり、恐い坂道があったり見あきなかった。母はよく岬の端の高みへきて一服した。半島の先端にある村や、島の名を教えてくれた。波しぶきのたつ崖下には、牛が寝たような岩がいくつもあって、まがりくねった細道がのびている。波打際に一軒家がある。家の裏はせまい砂浜で、くり舟がつながれている。墨絵のようなけしきだった。子供の頃だからただぼんやり見てすごしたが、そこらじゅうにあった巨松と、赤土の道と、島々のかすんだけしきだけは、いまでも臉から消えない。九歳で母と別れて、若狹を出て京都の禅寺で暮らし、その後、故郷へ帰らず、今日東京で暮らす私は、眼をつぶって若狹を思うとき、かならず、この城下町へ向かう途中の海のけしきがうかぶのである。人間の歴史とはいくつかの風景画でしかないといった人がある。なるほど、臉の壁に焼きついてはなれない故郷の海岸は、私にとって、郷愁のネガだというより、もはやこころの根につながる

絵なのだろうか。

のつに、こんなことを書くのは、じつは、いま手許にある古河力作さんの、少年時代に珍重したといわれる豆手帖を繙いていて、そこに、私が母とよく一服して海を眺めた場所からでなければ眺められない、若狭海岸のけしきが描かれているからである。豆手帖といってもいまの人にばかりにくからうが、名刺の半分ぐらいの大きさでマツチ箱ほど厚い。少年雑誌の付録にでも入ってきた手帖である。力作さんは、少年時から、異郷に暮らしてもこの手帖は大事に所持していたとみえて、死後、その持ち物の中から発見されている。手帖は、よく子供が丹念に描く乃木將軍や西郷隆盛の絵であったり、小遣錢出納のメモであったり、先生や誰かの似顔であったり、くだけた尻とり唄のおぼえ書きであったりして読んでいても楽しいが、私の判定するところでは、これは力作さんが十三、四歳からのメモといつてよい。第一頁に、4Bか何ぞの太い鉛筆で山と海のけしきが描かれてある。まず眼につくのは峰のとがった富士型の青葉山である。手前にやや濃いめの内外海半島があり、左手前に接近して山が突き出て、少年の筆にしては、遠近法にかなったみごとなスケッチであるが、このけしきは、青井岬の端^{はな}の高みからでないと眺められない。山と半島の手前は白い海だ。一艘の帆かけ舟がういている。空には雲が走っている。若狭を知る者にはこのけしきはどこか淋しい。

青井岬の曲がり角から、小浜町へ降りる手前に、えぐれた谷があつて、六呂谷とよばれてい

る。谷の入口にいま火葬場が建っている。そこへ登る道の片側に、「妙徳寺参道」と彫字のある標石が、気をつけていなければ見すくすくらの場所にかくれてある。自転車ものぼれないぐらいの坂道である。歓喜山妙徳寺、あるいは文殊峯と町の人びとがよぶ曹洞宗永平寺派の古寺へゆく道である。この寺の墓場に古河力作さんは眠っている。私が、岬の端から、力作さんが西を眺めて描いたであろう十三歳頃のスケッチを思いだすのも、じつはこの山に眠っている力作さんの霊に深い感慨をおぼえるからである。力作さんは少年時に写生したけしきのうしろ山で眠っている。

古河力作さんのことは、世に「大逆事件」といわれる天皇暗殺謀議の罪で明治四十四年一月二十四日に、東京市ケ谷で死刑を執行され、三日後二十七日下落合の火葬場で焼かれたので知る人も多い。歴史家は、力作さんのことを、若狭小浜郊外の雲浜村に生まれて、二十歳で東京に出て、（じつはそれまでに神戸在住の丁稚期間があるのだが）滝野川の草花園で園丁をつとめているうち、社会主義を信奉するようになり、幸徳秋水や菅野スガと往来するうち、大それた陰謀に加わって処刑されることになった。算え年二十八歳の小男だと記しているけれども、不思議なことに力作さんが永眠する寺の名さえ正確につたえた人は少ない。「革命伝説」の労作を成し遂げた神崎清氏も、青中山と記している。青井山のまちがいで、妙徳寺は正確には歓喜山といい、地籍は「青井」にぞくしているのである。背山を青井山やまといい、いまは新国道が岬にトンネルをつ

くって貫通しているけれど、私や力作さんが少年だった頃は、まだ青井山が海へなだれ落ちる端を曲がらねば、小浜町へも、私の村へもゆけなかった。

大逆事件は無謀な法吏によって十二人の死刑囚をみたことで結着がつけられている。この明治四十四年の不幸な出来事については、私は生まれていない頃のことなので、大きくなってから知った。しかし、子供心に誰から教わったか、「西津の主義者」ということはかすかにある。西津というのは力作さんの生まれた土地の名だが、ここから「主義者」が出たと村人は噂していたのだろう。子供に「主義者」などということばが、何を意味したかわかるはずもなかったが、何か暗い影をおびて耳につたわり、母につれられて小浜へゆく途次にも町はにぎやかな家なみで眼をうばいはしたけれど、その町の向こうの村に主義者がいたといった関心は確かにあった。私が生まれたのは大正八年のことだから、力作さんの処刑があつて約八年後である。その頃にもまだ、力作さんのことが村人に恐ろしい禁句として、低くささやかれていたのである。そういえば大正十二年は関東大震災があり、大杉栄が虐殺される事件がつたわっているはずだから、なおさら社会主義者ということばは村人の口にのぼったのかも知れぬ。私が小学校へ入る頃は、大正デモクラシーの末期である。十五年十二月は大正天皇の崩御である。昭和に改元されたその元年は六日で終わり、翌二年をすぎて、三年は御大典であつた。満州事変や上海事変に突入してゆく軍国主義時代がはじまる時期で、「西津の主義者」ということは、誰の耳にも恐ろしいものの代名

詞とうけとられはじめた頃だ。これは、奇妙な感覚だが、私には「悪いことをすると警察へつれてゆくぞ」と親が脅した時の、あのうす気味悪い恐ろしさとながった。

力作さんのことは、処刑後に発見された遺言状や、「手記」によって、事件にかかわる経過や心境のあらましがあらかたわかつている。草花栽培の園丁をつとめた人柄とは似つかぬ天皇暗殺の陰謀荷担といわねばならないが、その力作さんが、なぜそんな事件に加わらねばならなかったかということも、いまは、史家によって謎は謎のままながら、ある程度の確かな推断もなされているとみてよい。遺言状でも、力作さんは『非墳墓論者ですから墓はつくらないで下さい』といひ、そんな金があるのだったら、おいしいものを食べて下さい、と社会主義者らしく、父慎一氏に死後のことについて遺している、それにもかかわらず、遺族の方たちが、生家からかなり離れた青井山の中腹の寺にひっそりと墓をつくって葬っているのは何故だろう。私はいま、力作さんの少年時の手帖の絵をみていて、この因縁に驚くとともに、力作さん自身さえ、ここに眠るとは思わなかったろうに思いを馳せて眼頭が熱くなる。墓はいらぬといいのこして処刑された人は、「西津の主義者」といわれ、その名さえいうことをはばかれたが、やはり郷土の一角にお父さんに抱かれて眠っているのである。墓は親子一基である。

寺へ至る道は急坂道の淋しい一本道だが、ふりかえると美しい紫紺の海がみえる。路端は春ならば、いくたの野草が咲き、山には小ぶりの桜も咲く。冬は落葉樹の混じった松の下道に雪がっ

もり、山門に至る道は風光絶佳だ。妙徳寺は、禪宗寺であるため町なかの真宗寺のような明るさはない。山かげにぽつんとかくれるようにしてしずまる禪道場である。墓地は庫裡の手前の土蔵よこをまわって、寺の裏側に面した小高い丘にあるが、墓石の林立する中央のあたりに、「三島氏」と彫られた墓石群がみえる。その一基に、「応声院慎道全逸居士」と戒名のあるわきに、「還源院行山恵力信士」と小さく彫られてある。応声院は父慎一氏であり、大正五年八月二十二日没とある。還源院は力作さんのことで、明治四十四年一月二十四日没とある。処刑の日である。

力作さんの墓に詣でて、還源院行山恵力信士と口ずさみながら、この戒名が示す意に思いをふかめて私は合掌した。還源とは、源へ帰る意であり、行山とは山へ向かう意であり、恵力とは、心を他につくすめぐみの人、力作さん……といった意でもあろうか。同じ禪派でも、臨済派に得度した経歴をもつ私は、禪寺の和尚が戒名をつくる際に、亡者の人となりをよく研究して苦心する経過を知っている。戒名が、下落合火葬場で茶毘に付された際、死体引取人であった堺枯川氏が依頼したところの東京道林寺の住職の作でもある。力作さんの生涯を偲ばせて心あたたまる「名づけ」のような気がしてならない。

『灰いろの獄窓につながれていても、彼のまぼろしの花壇の中では、バラやチューリップの花がうつくしく咲き乱れていたにちがいがなかった。すでに死刑の宣告をうけた彼がちかづいてくる死の足音を聞きながら、べつにおびえる風もなく、世話になった園主にあてて経営上の改良方針や

注意事項をこまかく書きのこした心のおちつきは全く驚嘆すべきものがあつた。彼は公判廷に花を愛する園芸業者から犯罪人を出したことはほとんどないと語っているが、平和でうつくしい自然からうけた精神的な感化のふかさを語りたかつたのであらう』

とは神崎清氏の、力作さんの残した文書をよんでの感想である。これは力作さんへのふかい愛情である。花づくりにいそしんでいた二十六歳の若者が、どうして天皇暗殺という恐ろしい謀議に参画しなければならなかつたか。そのところを解くはつきりした資料はないけれど、いま、ここに私が「古河力作の生涯」と題して、同郷の社会主義者の人生に私ながらの記録を思いつたのも、じつは花づくり人が犯罪人とならねばならなかつた謎へのかすかなアプローチを試みてみたい念願があるからにほかならない。

もとより、私に「西津の主義者」への愛情はあるものの、史家よりも詳しい知識があるわけではない。私の生まれないころの事件であり、力作さんの生涯でもある。資料は史家の著書や、現在その遺族の最後の人である令弟三樹松氏に願つてその回顧談を借りねば任を果たすことは出来ないが、谷一つへだてた若狭の海を睨んで、他郷に暮らした力作さんは、花づくりの園丁で若き生涯を終えたけれども、若狭を捨てた私の望郷のけしきの中にこの人はいる、それは疑えぬ。

二 章

古河力作は、明治十七年六月十四日に、福井県遠敷郡雲浜村竹原第九号字西作園場九番地に生まれた。父は慎一、母は八尾（やを）といった。長男で弟妹があつた。次男三樹松、長女つなである。父慎一が古河姓を名のつたのは明治のはじめ頃で、それまでは三島姓であつた。なぜ改姓したか理由は詳かではないが、妙徳寺過去帳には慎一氏が改姓した記録がある。三島家は西津の旧家古河屋の分家だつた。古河屋は小浜近在では名のとどろいた富豪で、昔は加賀の銭屋五兵衛とくらべられたほどの廻船問屋で、大きな帆掛船を九艘ももっていたといわれている。もつとも、力作が生まれた明治十七年頃は、江戸時代の羽振りはなかつたろうけれども、宏大な家屋敷や、別邸の今日の面影をみても、分家の三島家が、それほど貧家であつたとは思われない。三島家は現今の市内山根屋旅館の宏大な地籍がその跡であることでも想像できるが、作園場はその別宅であつたといわれる。「小浜、敦賀、三国史料」に古河屋のことにふれた一文があるので抜き書きしてみる。

『古河氏は江戸時代中期以後西津において廻船問屋を営み代々嘉太夫を通称とし、小浜地方において第一の斯界の地位を占めた。先祖は石野孫六といい、西津下竹原村で漁業に従事したが、三代教俊（法号宗哲）は廻船問屋古河屋久右衛門に奉公し、享保中ごろに独立し、主家古河屋の別家となって、西津長町で廻船業をはじめ、古河屋嘉太夫と改称した。四代教重のとき、廻船の傍ら酒造をはじめ、六代教泰のとき、寛政ころには家業次第に隆盛となって廻船七艘を有した。古河家の現当主古河嘉雄氏は嘉永三年八月朔日の日附ある廻船絵馬を所蔵するが、栄宝丸、嘉明丸等九艘の廻船が描かれており、これは三、四百石より八、九百石に至る。明治元年、一時全廻船を大阪に売却したが、翌年三艘を買入れ、家業を続け、同十三年に廃業したという。八代教成のときである』

力作の父慎一は竹原の作園場に、三島孫右衛門の長子として生まれたが、その母は古河本家の八代教成の姉にあたるところをみると、三島家は、古河本家と濃い姻戚にあたったとみてよい。慎一の妻やをも、古河家の出で、慎一の従妹に当たった。すなわち従兄妹結婚であった。ために、子らに、矮小体軀の血統をみている。力作、三樹松、つな、それぞれ小軀である。富裕な家柄に多い近親結婚の弊が血に及んだと解釈してよいが、古河力作は、つまり、このような、生活に困らない家系に生を得ていながら、矮小体軀だったために、その精神形成に特異な劣等意識を育くんできたことが想像される。いま手許にある、大逆事件被告弁護を担当した今村力三郎弁護

士のメモを繕っていると、力作の家系に、異常者のいた記録がみえる。メモは今村氏自身の走り書きであるが、

『元首ニ対シ兇暴ヲ加フル意ナシ、古河力作社会主義ヲ捨ツ。力作ノ父母ハ從兄妹ノ結婚。力作ノ叔母古河チヨ白痴、七、八年前死、力作ノ曾祖父三島孫右衛門ノ妹アサ白痴、力作ノ曾祖父孫右衛門白痴、孫右衛門ノ祖母ヤス白痴、力作ノ祖母古河サクノ弟古河教成狂、力作ノ祖母古河サクノ叔父古河嘉六狂、力作ノ父慎一ノ從弟古河成一（教成ノ長男）ハ現存スルモ頗陰鬱』

とある。冒頭にある「力作社会主義ヲ捨ツ」の一語をみてもわかるように、事件の謀議に参加した力作の心証をその家系にさぐって、力作が元首に兇暴をふるうような人間でなかったことを主張するための記録とみられるが、弁護士の調査であるし、裁判資料になったことでもあるから、事実関係についてはそう虚偽の記述とは思われない。とすると、三島家には、力作の曾祖父時代から白痴、狂人が多く出ていることになる。また、古河成一が鬱病患者であり、その父教成が「狂」であったとすると、八代古河屋が、その家業を廃したと「史料」にみえる記録も、この今村弁護士の記述と符合するようで、かつては加賀の銭屋五兵衛と肩をならべるほどの豪商であり、先祖にはいくたの傑物もいた（「海商古河屋」）古河本家とその分家の三島家には、血族結婚が承継されていて、その弊によって親族の一部に異常が見られ、宏壮な邸宅で、格式を維持して暮らした両家の暗い内側を覗かせるようである。このような血の事情が、作園場の家でうぶ声を